

“ドビ流し”がこんなに魅力的なのは何故なのでしょう

2012.1.28 NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会 代表 加納義彦

私はこの“ドビ流し”という言葉に大きな可能性を抱いています。“ドビ流し”は隔離された池を開放系にする瞬間なのです。“隔離された世界”を開放するって、なんて魅力的なのでしょう。私はいつも、私の世界が広がることに大きな関心と興味を抱いています。朝、ビルの隙間からひとり空を眺めていると、解放される気分になります。空を見上げると雲が流れる時も、真っ青な青空が広がる時も自由で開放感を感じるものです。

“ドビ流し”は内の世界と外の世界は一瞬繋がり、今まで内部に溜まっていたヘドロ（汚泥）が洗い流されます。そして、そのため池は新たにリセットされます。底樋とは池の底に溜まった過多の栄養分が外に向かって流れ出す通路のことです。私たちが内に秘めている欲望が満たされる瞬間と何かよく似ているように私には思えるのです。宮崎駿の千と千尋に出てくるお湯場で、千が腐れ神の栓を抜くと大量のヘドロと自転車や冷蔵庫などの不法投棄物が流れ出てくるシーンはほんとうに“ドビ流し”そっくりです。“ドビ流し”をすることで腐れ神は川の神に変身し、空に昇っていきます。そのあとに残った金色に輝く小さな宝石がキンタイ（ニッポンバラタナゴの方言）だったので

す。

私たちは一見内と外に分けられた世界に住んでいるように思っていますが、私自身のからだも毎日もの（物質）としては入れ替わり、ひと月もすると以前の私とほとんど異なる物質からできているなんて、あまり感じないです。物は入れ替わっても精神的な同一性が保たれているから、なんの不思議も感じません。しかし、精神的にも内と外が大きくなるときがあり、内面に影響を受けることが多々あります。それは欲望が満たされる時です。

“欲望としての他者救済”という本を本研究会の金泰明さんが書かれています。私がこの本を読んだとき、すぐに思い浮かんだことは、“欲望としてのタナゴ救済”という言葉でした。読み続けるうちにあまりにも感覚がフィットするので、ついつい本人にそのことを打ち明けました。金さんは笑いながら真剣にその理由を説明してほしいと言われたのです。

わたしは以前から、他我問題に関心があり、他の人に認められるということ（他者承認）とはどういうことか、あるいは、ほかの人と同じだと感じられるのはなぜだろうとか、などと考えることもあるのですが、私はどちらかといえば直感人間ですから、感じるものは感じるというほかないとも思っていました。そこで、タナゴとの間に生じる他者承認とは、いったいなんだと思いますか。この問題が私にとって大変重要な問題なのです。つまり、“欲望としてのタナゴ救済”の本質はこの点にかかっていると思います。